

# 中高生とともに差別と闘う

## 『東京オリンピックと人権』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



この一年以上連載してきている間、新型コロナウイルスはずっと猛威を振り続けていました。

昨年から一年延期されて開催されたオリンピックにも、かつてない影響を及ぼしました。と同時に、日本と世界の人権感覚のずれも露呈されたように感じました。

常々私が周囲にこぼすひとことがあります。

「まだまだ人権意識が低い」

それは身近な中学生や教員だけでなく、私が暮らすこの町の人々も。もっといえば、もしかするとこの国全体の人権意識が低いと言えるかもしれない。言われた側はきょとんとするのですが、それが今の私の実感です。もちろん人権意識の高い人もいますし、狭義的にそうである人もいます。でも平均したとき、やはり人権意識は低い気がします。正しいかどうかは分かりません。直接実態調査をしたわけではありませんから。でもそんな現実の一端が、このオリンピックを機にいくつも表出したように感じました。

### ドタバタ辞任劇

そのうち二点について。一つは、開会式直前に起きたドタバタ辞任劇。もう一つは、ネット上の選手への誹謗中傷です。

一つめのドタバタ劇についてですが、聞いてすぐ、どこか気持ち悪さを感じました。辞任した理由については、辞してやむなしと思います。ただ、直接、よく知らない者が断じ

ることができるのか。いったい断じたのはどういった立場の人物で、どこまで分かって言っているのか。そして、よく知りもしない者までもが便乗し、煽ってはいないか。といった点についてです。

反省しないのなら辞任して当たり前ですが、「反省してるなら、もういいじゃない」とも思いました。まるで、「敗者は一生敗者。復活戦はあり得ません」

「二度でも負ければ人生終わり」とでも言っているように聞こえます。まるで、不寛容な社会です。

それにもまして思うことは、非難した側に対して、

「今までの人生、あなたは潔癖に生きてきたのですか？」

という事です。果たしてそんな人がいるでしょうか。人は生きていけば、なにがしかの間違いや失敗、いけないことをしつづ生きているのではないのでしょうか。だからこそ、傲慢になることなく、謙虚さを胸に刻むことが肝要なのではないかと思うのです。そのうえで、自分がしたことにきちんとケリをつける。当たり前のことなのです。

なかには、決して許されることのない間違いもあります。それまでも、無かったことにしろとはいいませんが、果たして今回は、そこまでのことだったのでしょうか。

### 選手への誹謗中傷

それともう一つ。メディアやネットを通じて、私たち自身も煽りに乗っ

かつてはいないかといった点についてです。

これは、選手への誹謗中傷とも相通じます。メダルが取れなかったからといって、金メダルではなかったからといって、思うような結果が出なかったからといって、いったい誰に責める権利があるのでしょうか。思ってしまうことは仕方ないのかもしれない。でも、他人に便乗し、浅はかに拡散させることについてはどうでしょうか。もう少し想像力を働かせられないものでしょうか。

SNSなどで公言することで、注

目を浴びたいのかもしれませんが、同じ思考をする仲間を探し、つながり合い、慰め合いたいのもかもしれません。いずれにしても、みみっちいとしか言いやうがありません。どうしてそんな思考になったのでしょうか。

### 軽薄短小な人間力

日本の技術力を象徴していたはずの「軽薄短小」が、私たちの人間力に転化されていないかと危惧します。

受験生ともなると、入試にある面接試験の練習をします。そのときに、「第一印象が大事」と言うことがあります。間違いないでしょう。でも、そのことを強調するあまり、「第一印象がすべて」に自動変換されているように感じることがあります。そして第一印象を良くするために、理想の自分を演じ、表面だけを取り繕うことに終始します。

でも審査する側もプロですから、その当たりは差し引いて審査するも

のです。ましてや「第一印象がすべて」などとは思ってはいけません。となれば残る問題は、受審者に根づいた、「第一印象がすべて」という思考です。

後の人生で変容していくこともあると思いますが、その、「表面上をなぞるように物事を見る」という浅はかな思考が、薄く世の中全体に広がっているとすれば、どうでしょう。浅はかにしか物事を見ることができない世の中になつてきた結果と、SNSという便利ツールが合体した結果として、選手への誹謗中傷のようなことが起こったように感じられるのです。

今回のオリンピックだけの話ではなく、今後も同様の流れは続いていくでしょう。それに抗する手立ての一つが、人権教育でないかと思えます。様々な人の思いを乗せたメッセージを、他人事ではなく我が事として受けとめようとする人権教育の、継続した取り組みです。これは子どもだけでなく大人にも必要です。そうして、日本社会に人権文化を根づかせていくことです。

ほかにも、多様性や性的マイノリティについて、人権について報じられない日はなかったように思います。ただ、メディアから流されてきた情報をきちんと受けとめるだけのセンサーが私たちに働いたか。

せつかくのチャンスです。一過性にしてしまわないためにも、これらの問題について、まずは周囲の仲間とじっくり語り合ってみてはどうでしょう。そうすれば、少しずつ何かが変えられるかもしれません。